

# *A Traveller in Little Things*における W.H. ハドソンのエッセイ

W. H. Hudson's Essays in *A Traveller in Little Things*

佐 藤 幸 正  
Yukimasa Satoh

## 序

自然と共に長い生涯を過した Hudson は、小説以上に多くのエッセイを残している。第一作、第二作と小説を発表し、小説家として登場した彼は、1904年には遂に代表作 *Green Mansions* を上梓する。以来、彼は小説家として世に知られることになるが、公表された作品数から言えば、圧倒的にエッセイの方が多くのである。しかも作品数が多いというだけでなく、質的にもエッセイを高く評価する批評家も少なくない。技巧を要する小説家よりも、彼には自然と親しむことによって得た体験をありのままに記述する方が性分に合っていたのかもしれない。実際、彼のエッセイの多くは、彼の見聞した実世界の喜怒哀楽を、そのまま描写したものが多くのである。彼の対象とする題材の大半は、自然界から得たものであり、特にそこに棲息する鳥類が多い。彼には鳥類に関する専門書もあるほどで、鳥の登場しない著書はまず無いと言っても過言ではあるまい。英文学で Hudson と言えば鳥と言われる所以も、このようなところから来ているのであろう。アルゼンチンの大草原に生をうけ、そこで成長した彼にとって、草木や鳥類は生まれながらにして自由に観察できる環境が備わっていた。フラミンゴやハミングバード等に見られる色鮮やかな鳥類、オンブウや朝鮮アザミ等の珍しい草木類、広大なパンパスで草を食む牛や羊の家畜、あるいは近隣に住むスペイン系の美しい女性たち、これらはみな作者の実体験に基づいて採録され、作品化されている。1874年彼は祖先の国イギリスに渡るが、この自然志向は少しも変らず、折をみては地方に出かけ、鳥類や自然を観察し続ける。これから述べる晩年作、*A Traveller in Little Things* (1921) も地方に取材した作品で、採鳥に出かけた作者が観察した鳥類や、道中出会った村人たちについて述べたものである。全篇37章から成るこの作品は、各章それぞれが独立

した小品となっており、連続した統一性は見られない。目次を見ればわかる通り、このエッセイは野鳥、村人、犬、村落、リンゴの花、想い出等、さまざまな事柄を雑多に収録した感がある。小論ではこのバラエティに富んだ小品集を通じ、作者の物の見方や考え方を考察してみたいと思う。なお、表題について一言触れておくならば、作者が旅先のホテルで知り合った人から、“You are a traveller in little things...”<sup>1</sup>と言われた言葉に由来している。ロンドンを離れ、地方の村落を訪れてはそこで生活する農夫や少女を、あるいはそこに存在する教会や付属墓地を好んで取材する作者にとって、「小さき物への旅人」というタイトルは当を得たものであり、彼は躊躇することなくこの言葉を借用したのであった。

## I 二人の兄弟

章中、作者は二人の兄弟について、三種三様の物語風エッセイを載せている。即ち、“Blood: A Story of Two Brothers”, “A Second Story of Two Brothers” 及び “A Third Story of Two Brothers” であるが、このなかで特に興味をひくのは二番目の “A Second Story of Two Brothers” と題した一篇である。それは ‘a storyteller’ と呼ばれるほど物語の巧い彼が、エッセイにおいても物語手法を活用しているからである。もう一つの興味は、このエッセイにはその内容において、“El Ombú” という短篇に類似した点が見られるからである。まず、物語の巧いという点に関して述べれば、このエッセイはかつて紙上に掲載されたある事件記事を素材に、自己流に創作したもので、その手腕は見事に発揮されている。また、構成面から言ってもこの小品は三篇のなかで最も纏まっており、ストーリーの展開も自然で無理がない。このエッセイは1850年代から1880年代にかけて、アルゼンチンのある地方に実際起きた人攫い事件を扱ったもので、当時のヴェノス・アイレス紙にはこの事件が掲載さ

れたという<sup>2</sup>。しかし、この事件も月日の経過につれて作者の念頭からすっかり消え去っていたが、フロリダに住む友人の便りが機縁となり、当時の事件を思い出し、再現を試みたのである。

1850年当時のこと、ヴェノス・アイレス南方に、スコットランド人の移住者である Gilmour という男が、羊と牛を飼って暮らしていた。ある日のこと、彼は雇っていた土着の牛飼いの一人を、職務怠慢を理由に、突然解雇してしまう。解雇された牛飼いは復讐を誓い、腹癪せにその雇主の子供を一人連れ去ってしまう。その雇主は子供を取り戻すため、何年も捜索を続け、多大な財産を費したが、結局発見できなかった。このような次第で、家族のなかで子供の生存を信じ、いつか再会の日を夢みていたのは母だけであった。しかし、ある日のこと、この家に一人の旅人が立ち寄ったことから、事件は俄に明るみに出た。その旅人は同席していたこの家のもう一人の息子を見て、彼とそっくりな青年に辺境の前哨基地で合ったことを告げたからである。この家の息子は早速指摘された場所へ兄を探しに長途の旅へ出る。しかし、兄の所属部隊は既に移動命令を受け、その場には居なかった。二度三度と捜索を繰り返した弟は、兵士となって軍務についていた兄を遂に発見し、家に連れ戻すことに成功する。5歳の時牛飼いに連れ去られて以来、30年振りに戻った彼は小さい頃の記憶を完全に喪失し、年老いた母を失望させる。母は昔の記憶を少しでも蘇らせるため、傍に付きっきりで手を尽すが、無駄であった。彼は隙を見ては家から抜け出し、使用人である牛飼いの仲間に入り、かれらと同じ言葉で話すのを好み、むしろかれらを同胞とみなすのだった。椅子に腰かけ読書したり、耳慣れない言葉で話す仲間、つまり家族と一緒に居るのを窮屈に思うようになっていたのである。

要約すれば以上のような内容であるが、作者のエッセイに見られる物語の特徴は、本質的には小説における場合と大差なく、言わば短篇小説を読んでいるような錯角に陥る。このエッセイのテーマは何かと言えば、環境の変化に伴って人間の性格が一変することを述べている。“Blood: A Story of Two Brothers” では、これとは反対に、人間の品格や性格は環境の変化によるのではなく、家柄や血統によって定まることを述べたものである。南米で、スペイン系の血をひくある名門の貴族が、一人息子の遊び相手に、身寄りもない浮浪児同然の土地の子供を引き取って養育するが、青年になった二人を観察してみると、両者ともハンサムで立派な服装をしているが、品格やマナーは全く異なり、血は争えないことを述べている。ここでは土地の浮浪児が、身分の高い家族の一員として我が子同様に育てられたが、持って生まれた性格

までは変わらないことを例示したものである。このエッセイは前述の新聞記事を素材にしたのとは異なり、作者が南米時代に体験した実話に基づいたものであるが、いずれの場合も細やかな素材を利用して、巧妙に物語る手法は共通する。

“A Second Story of Two Brothers” の持つもう一つの興味は、1902年発表の“El Ombú” に一部類似点が見られることである。両者を比較してみると、子を思う母親の気持が双方に強く滲み出ていて、家を離れた我が子の生存を強く信じ、再会の日を忍耐強く待ち侘びる場面には共通性が見られる。もっとも“El Ombú” においては息子と再会する前に母親は亡くなり、他方息子も父の仇討に出かけたのは良いが、不幸にも返討に合うという一層悲惨な幕切れになっている点は異なる。エッセイでは、その土地の旅人が息子の消息をもたらしてくれるが、短篇においても同様、ある老兵が消息をもたらしてくれる場面が設定されている。旅人と老兵の違いこそあれ、それぞれの家族がふとした機会に、第三者によって貴重なニュースを得るところは同じである。しかも、それぞれの息子が最初の指摘場所には居らず、既に移動し軍務についていた場面も類似する。更には、息子を引き戻すため、陸軍省へ出かけてパスポートを入手し、除隊の許可を得ている点も双方に共通し、一部構想まで類似性が見られるのである。

“A Second Story of Two Brothers” は、これを代表的な短篇である“El Ombú”と比較するならば、幾つかの場面で類似点が見られる。しかし、ストーリーの展開、構成や構想など全体的に見れば、全く異質の作品であることに相違はない。後者の場合はオンブウという樹木に纏わる迷信を扱い、見事な哀話に仕上げたもので、Haymaker 教授も短篇のなかではベストだと認めている通り<sup>3</sup>、内容的には比較にならないほど優れた作品になっている。このように、作者の描く世界は村人たちの素朴な日常生活に題材を得、表題通りの「小さき物」を扱うことを特色とするけれども、その作品が読者の感情に作用する力は決して小さなものではない。

## Ⅱ 地方の少女観察

ロンドンを離れ、地方へ探鳥に出かける作者は、道中いろいろな人たちに出会う機会に恵まれた。その年齢層は大人から子供までかなり広範に及ぶが、彼は特に幼い女の子たちに関心があると見え、彼女たちとの出合を数多く取り挙げ、興味深い観察をしている。例えば5歳の女の子を、同年齢の男の子と比較しながら、その精神発達の相違について述べるという具合である。彼の観察に

よれば、男の子の精神発達はゆっくりと、死ぬまで続くが、女の子の場合はごく早期に完成してしまう。また、女の子には世間慣れした (sophisticated) ところが認められ、これは生まれつきのものだと判断する。例えば、女の子が大人の前で、人をからかうような笑みを浮べ、いたずらっぽい表情をして見せるのがそうである。女の子のこのような世間慣れした性質は、彼によれば、やっと両足で立ち上がる頃から始まり、いたずらの最初の徴候ということになる。これは、あるいはこれに類似した例は、作者の指摘を待つまでもなく、またイギリスの例に限らず、幼児にしばしば観察されることで、体験者も多いのではないと思われる。女の子にはごく早期から母性本能が見られるが、その理由を作者は、女の子にはそもそも対象物の世話をして、自己満足しようとする性質があるからだと考える。女の子が、対象物としての人形や、あるいは人形の持つ非実在性に興味がなくなれば子犬や子猫などの生物を世話し始める傾向は、確かに共通して見られる現象と言えよう。彼はまた、女の子を魅力的にするのは、このような本能的衝動が、模倣や早熟と組み合わされているからだと考える。次に作者は、一体彼女たちが物を考えるか否かについて論じる。それによると、考えることに違いはないが、彼女たちのごく初期の思考には自己意識がないため、真意もわからず物を考えるということになる。作者が5歳の女の子に「生きるって、何の役にたつの？」<sup>4</sup> と質問されて、愕然とする場面などはその好例であろう。実際問題として、5歳程度の子供に、生存の意義などわかる筈もないのであるが、その子は真顔で質問している。このように作者は地方の子供、特に女の子に関心を寄せ、その精神発達情況に着目する一方で、地方に残存する古い習慣へ目を移すのである。

作者が例によって、広い村道を自転車で通ると、5歳になる女の子が道端に寄って、例の膝を折りまげて身を低くしながら会釈 (curtsy) する場面に出会う。彼女の態度や口調はまるで高貴な人に対するそれで、大いに彼は面食うのであるが、子供の大人に対するこのような会釈は、本質的には仮面であり、第二の天性と考える。農業地帯に大人や老人と生活しているうちに、子供は祖母などの真似をするようになり、人に合えば領主と思い、例の会釈をするのだらうと推測する。アメリカ・インディアンの子供の例を引いて、子供は生まれ育った環境に影響され、それに相応しい仮面を被っているのだと考える作者は、例の会釈も表面的な、仮面の結果にすぎないと判断する。しかし、作者は女の子たちの古風で、趣のあるこの会釈が、イギリスの田舎から消滅することを望んでいるのではない。それどころか、一部の地方を除き、こ

の習慣が消え去ってしまい、これに代わる謙遜、もしくは尊敬を示す挨拶の仕方が無いことを、残念に思っているのだ。

女の子の魅力、あるいは美しさについて、作者がどのように感じているのか、次に述べてみたい。ロンドン北東部の海岸 Cromer で、彼は10歳位の少女に出会うが、その時の彼女の印象は忘れ難いものであった。浜辺の遊歩道を歩いていた彼は、5人のグループが近づいて来るのに気づく。そのグループは9歳か10歳位の少女と、大人4人から成り、彼が合う時はたいてい散歩中であつた。かれらの厳格そうな表情や、古めかしい黒い服から判断して、作者は宗教心の篤い人ではないかと思うのであるが、話をする機会は得られなかった。一度少女とはふとした機会に、言葉を交わすことができたが、彼はその時魅惑され、仄かな愛情さえ感じる。彼の持論では、女の子が自己を意識し始める年頃になるとその魅力を失い、最高に魅力を発揮するのは5歳から7歳頃までとする。しかし、それには稀に例外のあることを認めているように、この少女の場合、まさにその例外的存在だったのである。彼は彼女に始めて合った時の印象を次のように記している。

Her large eyes were blue, the rare blue of a perfect summer's day. There was no need to ask where she had got that colour; undoubtedly in heaven "as she came through." The features were perfect, and she was pale, or so it had seemed to me at first, but when viewing her more closely I saw that colour was an important element in her loveliness—a colour so delicate that I fell to comparing her flower-like face with this or that particular flower. I had thought of her as a snowdrop at first, then a wind-flower, the March anemone, with its touch of crimson, then various white, ivory, and cream-coloured blossoms with a faintly-seen pink blush to them.

Her dress, except the stockings, was not black; it was grey or dove-colour, and over it a cream or palefawn-coloured cloak with hood, which with its lace border seemed just the right setting for the delicate puritan face. She walked in silence while they talked and talked, ever in grave subdued tones,<sup>5</sup>

人物描写をするのに、姿や形はとにかく、目や髪、あるいは皮膚の色を述べるのを常套手段とする作者は、ここでもその方法を用いている。即ち、天から得たよう

なその青い目、特殊な花のような顔色などがそうで、人物描写におけるこれらの特色は、初期の作品から晩年作まで終始一貫している。色を表現する際の譬喩について述べれば、それが明喩であれ暗喩であれ、その用語として自然物や自然現象を用いている場合が多い。この場面は、遊歩道をしかつめらしい表情で、ぼそぼそ話しながら歩く大人の後を、物も言わず、もくもくとついて歩く少女を描いたものであるが、作者は彼女の姿に Milton の憂いに沈んだ尼僧を想起する。このグループに二度三度合ううちに、少女の方も彼を意識した様子で、目を上げては、はにかむような優しい表情を浮かべるのであった。その後、彼は砂浜で遊ぶ彼女と、二言三言、言葉を交わしただけであったが、次の日、再び合った時の喜びを次のように表現している。

Our next encounter was on the parade, where she appeared as usual with her people, and nothing beyond one swift glance of recognition and greeting could pass between us. But it was a quite wonderful glance she gave me, it said so much:—that we had a great secret between us and were friends and comrades for ever.<sup>6</sup>

その少女は、素早い目配せと挨拶をしただけであったが、その時の彼女の目は、十分に物を言ったことがわかる。この場面は Beatrice に一目惚れした Dante の心境に似た、清純霊妙な愛を感じさせてくれる。また、この場面には、物言わぬ少女の魅力が的確に表現されており、読者の心にいつまでもその余韻を残すのである。彼女が浜辺で波と遊ぶ時の表情は、大人たちの仲間に居る時と違って、スイートピーの花のように愛らしく見えたのは、丁度処女作の *Transita* が波と遊ぶ時の表情を思わせる。つまり、自然と共に遊ぶ時の少女、例えば Rima にしても、この少女にしても、彼女たちはみな明るく、生き生きと躍動するのである。作者にとって、女性がただ美しくれば良いというのではなく、内部から湧き出る何かを秘めた女性でなければならない。例えば、その人自身の持つ性格や精神からくる魅力がなければならないのである。彼が “the beauty is the good”<sup>7</sup> と言うのはこのような意味を含むのであって、単に美しいのはこの範疇には入らない。

### Ⅲ 村の訪問者

地方の村落を訪れる作者は、その土地の鳥類や自然、あるいは村人たちの観察を常とするのであるが、村そのものを描いたなかで、“Surrey Village” の冒頭ほど美し

く描かれた風景は少ないであろう。それは次のように書き記されている。

Through the scattered village of Churt, in its deepest part, runs a clear stream, broad in places, where it spreads over the road-way and is so shallow that the big cart-horses are scarce wetted above their fetlocks in crossing; in other parts narrow enough for a man to jump over, yet deep enough for the trout to hide in. And which is the prettiest one finds it hard to say—the wide splashy places where the cattle come to drink, and the real cow and the illusory inverted cow beneath it are to be seen touching their lips; or where the oaks and ashes and elms stretch and mingle their horizontal branches;—where there is a green leafy canopy above and its green reflection below with the glassy current midway between. On one side the stream is Surrey, on the other Hampshire. Where the two counties meet there is a vast extent of heathland—brown desolate moors and hills so dark as to look almost black. It is wild, and its wildness is of that kind which comes of a barren soil. It is a country best appreciated by those who, rich or poor, take life easily, who love all aspects of nature, all weathers, and above everything the liberty of wide horizons.<sup>8</sup>

散在する Churt 村を通して流れる美しい川。荷馬車馬が渡っても、せいぜいけづめ毛が漏れる程度の深さ。かと思えば、川幅の狭い箇所では河鱒が棲息するほど、深い所もあるという。川面に倒影を映し、水を飲む牛。緑なす木々、広大なヒースの原。どれもみな美しく、のどかな村の風景が感じられる。作者も空想して言うように、気の利いたエンジェルが身に付けていたマントを脱ぎ、この地に敷いてあげたのであろうか。まさにこの地はオアシスの趣があり、疲れた者の心を癒す。作者は自然には人間の心を生き生きさせ、慰めてくれる力、一種の治癒力のあることを信じている。このことは彼自身、“Nature herself in her good time heals the wound she inflicts...”<sup>9</sup> と明言していることから理解されよう。他の作品のなかでも、自然の治癒力を認める箇所が発見され、夙くは *Birds and Men* (1901) において、森の風に健康回復の力のあることを述べている。<sup>10</sup> また、自伝と考えられる *Far Away and Long Ago* (1918) においても、彼自身述べているように、作品の持つ興味は

自然に治癒力のあることを強調したのだ、ということになる。<sup>11</sup> 小説であれ、またエッセイであれ、このように自然の治癒力を繰り返して述べていることから判断すれば、彼の自然観の一つの大きな特徴と言えよう。

作者の自然観に言及するならば、彼の場合、自然や野生生物に対して抱く、ある種の感情を暗示しない作品はほとんどないと言えよう。具体的にこの感情を説明するために、次にその例を挙げよう。

There are beautiful moments in our converse with nature when all the avenues by which nature comes to our souls seem one, when hearing and seeing and smelling and feeling are one sense, when the sweet sound that falls from a bird is but the blue of heaven, the green of earth, and the golden sunshine made audible.<sup>12</sup>

これは作者がある村道を自転車で通過中、暑い陽射しを避けるため、榆の木陰を見つけてそこに身を寄せていた時、クロウタドリの囀が聞こえてきた場面である。この囀と、緑なす地表を燦然と照らす太陽と、頭上の榆の葉から漏れる眩いばかりの光線に、彼の霊は自然と一体になってゆく。五感は一つとなり、快い囀は蒼空にすぎぬものと化し、金色の光線は音の世界を形成する。これは彼が自然のなかへ自己投射することによって、その意識が自然の一部になった状態を述べたものである。こうなると自然は観念的なものとなり、抽象化されて一種の幻想の世界を創り出す。この精神機能が更に嵩じてくると、彼は自然のなかに、人間の知性に似ているが、それ以上に強力な知性を認めることになる。これは彼の唱えるアニミズムの思想であるが、彼の自然観にみられる大きな特徴となっている。このような精神機能を扱った例は、作品のなかにしばしばみられるのであるが、特に小説においてはその効果を発揮し、芸術性を高める要因になっているのである。自然観でもう一つ注目したいのは、彼は自然を一種の摂理と考えていることである。人間が自然を遵守するか、それとも破壊するかによって、われわれがその返礼を受けたり、罰を受けたりするのだという考えである。これについては、彼の答えを待つまでもなく、現代社会が自然を乱開発した結果、どのようなかを顧みれば、理解されることであろう。このような彼の観点を考慮するならば、彼は予言者の役割を果たし、後世に警告を発していたと受け取れるのである。

自然との触れあいを求めて村落を訪れる作者は、3月も終りに近い頃、Wiltshireにコテージを借りて住む。あたりは静寂そのもので、風も冷たかったが、夙くもその

軒下に雀が巣作りを始めていた。地面に目をやると、枯葉のなかから、若草の芽が頭を擡げていたのである。風が和ぎ、灰色の空から陽が射すと、小鳥もそれに合わせて囀るのだった。そこで作者は野鳥の観察を続けるのであるが、注目すべきは彼には野鳥の種類は勿論、その数まで識別できる能力があることである。次に述べる一節はこれを証明する好例と思われるので引用してみたい。

Listening to, and in some instances seeing the singers and counting them, I found that there were two thrushes, four blackbirds, several chaffinches and greenfinches, one pair of goldfinches, half a dozen linnets and three or four yellowhammers; a sprinkling of hedge-sparrows, robins and wrens all along the street; and finally, one skylark from a field close by would rise and sing at a considerable height directly above the road.<sup>13</sup>

ツグミ2羽、クロウタドリ4羽、ズアオアトリとアオカワラヒワ数羽、ゴシキヒワ1つがい、ムネアカヒワ6羽、キアオジ3、4羽、ヨーロッパカヤクドリ、ヨーロッパコマドリ、ミソサザイ少数、ヒバリ1羽。<sup>14</sup> わずかな時間に、11種の野鳥とそれぞれの数を、しかも雌雄の区別まで確認してみせるなど、鳥類学者としての片鱗を示している。今日の探鳥家においても、鳥名やその数、あるいは雌雄の区別などは観察方法の基礎をなすのであるが、初心者にとってはこれがなかなか難しいのである。引用文に見られるように、作者の場合、鳴き声だけでその野鳥名を識別しているのであるが、1、2種ならばいざ知らず、10種を越える場合は至難の技と言えるであろう。Edward Garnettによれば、彼は森で鳴くヨタカ(nightjar)の鳴き声を上手に真似て、誘き寄せることもできたという。<sup>15</sup> 実は彼は作家として世に認められる前に、鳥類学者としてその道の一部の専門家に認められていた。後年 *Argentine Ornithology* (1888—89) が共著で公刊されるに及び、*Saturday Review* や *Nature* などがこれを取り上げ、大いに好評を博すのであった。<sup>16</sup> 以後彼は鳥類に関する一連の著書を公刊し、鳥類学者として多くのエッセイを発表してゆくのである。

彼がエッセイの題材として取り挙げるのは何も鳥類に限るわけではない。家畜や家禽、動植物や昆虫など、その範囲は広く、種類も多い。彼がスズメバチ(wasp)を取り上げ、エッセイにしている例を次に述べてみたい。“Wasp and Men”と題し、小品を載せているのであるが、これは三つの挿話から構成されている。彼がある田舎家に招かれ、朝食中のところへ、一匹のスズメバチが

飛び込み、皆を困らせる。するとその家の息子が、これを退治にかかるが、昆虫が不必要に殺されるのを嫌う作者も立ち上がり、二人で追いかけるが、結局作者の方が一瞬早く捕え、これを逃す。ここにはスズメバチであれ、蠅であれ、生物の無益な殺傷を嫌う作者の昆虫に対する態度が明示されている。第二の挿話は、Salisburyにある小さなホテルで経験したことを述べたものである。そのホテルでは聖職者たちの会合があり、隣り合わせに部屋を借りた作者は、早朝の凄まじい騒音に目を覚す。朝食事にかれらが説明してくれた話では、一匹のスズメバチが部屋に入り、これを捕えるのに大騒ぎになったのだと言う。力尽きて床に落ちたスズメバチを、手にしたスリッパで滅多打ちにした話を聞き、作者はかれらに向けて、よくも信心家と言えるものだ、と批難する。このようなことを聖職者に平気で言えたのも、80歳という彼の年輪のなせる業であろうが、それにも増して、生物の殺傷を嫌う彼の態度を如実に示したものとさえ言えよう。しかし、聖職者たちは作者の忠告に、腹をかかえて大笑いする。これに失望することもなく、彼は次に、ある高貴な方がスズメバチ保護協会を設立した話をし、自分もそれに加入の中込をしたが、認められれば誇りに思うと述べる。この話を聞いた聖職者たちは以前にも増して爆笑する。鳥類保護協会のために大いに運動し、協力を惜しまなかった作者にとって、スズメバチ保護協会に入会したいというのは自然な、真面目な話であろうが、聖職者たちはこれを知ってか知らずか、腹をかかえて大笑いしたというのは、なんとも皮肉な話である。作者の言い分がまた振っていて、笑われるのはお互い様で、自分の方がかれらより何倍も偉いのだ、と言っているあたりが実に面白い。Robert Hamiltonがこの小品集について、

Hudson's essays, as a whole, reveal an extraordinary variety; there is scarcely any part of life he has failed to touch, and touching, to make new with the power of his genius. Passion, humour, pathos, tragedy, fantasy, irony, characterization, description—all are there.<sup>17</sup>

と、いみじくも言ったように、ユーモアやペーソスを交えながら、人生の諸般に渡って述べているのである。スズメバチに纏わる第三の挿話は、やはり聖職者の話で、ある狩猟の大好きな牧師補が、獲物を撃とうとしてスズメバチの巣を踏みつけ、これに刺されひどい目に合い、とうとう病人になってしまうという話になっている。こんな話をすれば、心優しい、信心深い読者の感情を害するかもしれないのだが、と前置して語る作者ではある

が、前述の無礼な聖職者たちの態度と考え合わせてみれば、ちゃんとした落がついており、興味も倍加するのである。ここでも作者は自然は摂理であることを披瀝し、これに反した行為は報復されることを例示している。従って、作者は博物学者としてスズメバチを観察したというよりも、スズメバチと人間の交流が醸し出す、皮肉やユーモアを通じ、彼が生物をどのように見ているかを述べたものである。

#### Ⅳ 内なる世界への旅人

Hudson のエッセイはバラエティに富み、村の老若男女を描くかと思えば、動植物や自然を取り挙げる。しかもその表現法においては、客観的な表現を用いるかと思えば、他方では非常に主観的な場合もあり、その趣もまた大いに異なったものになる。次に述べる“The Return of the Chiff-Chaff”というエッセイは、チフチャフという野鳥を題材にしたものではあるが、実はそれは伴奏や背景音のような二義的な役割にすぎない。作者はその野鳥の歌声を耳にしているうちに、親しかった故人を連想し、いつの間にか読者を意識の世界へ運んでゆく。故人の記憶や思い出を辿る過去の世界と、彼の置かれた現実界との交錯が意識の流れに沿って複雑に織り成されている点、これまで述べたエッセイとは異質なものとなっている。

4月下旬の麗らかな日に、作者は予め発見しておいた小湖水にやってくる。辺りにはハリエニシダ(furze)やイバラ( Bramble)、あるいはリンボク(blackthorn)等の低木が生え、孤独を愛する者には絶好の場所を提供していた。湖水に目を移すと、半ばそれを覆い隠すほどのミツガシワ(bogbean)が密生し、丁度開花期を迎えていたことに彼は驚き、また喜ぶのであった。ハンノキ(alder)では、今を盛りにはチフチャフが鳴き、この上ない喜びに浸っていた作者は、突然絶えられないほどの悲しみに襲われる。目に見える自然そのものが喜びであると同時に、それが過去の苦い思い出と連なるためである。チフチャフの鳴き声、ミツガシワの白い花、これらはいずれも親しかった故人とその喜びを分かち合った思い出の鳥、思い出の花であった。自然を最上のものとし、これに対して同じ感情、同じ思想をもった二人にとって、生きることは死んで星の国へ行くよりも素晴らしいことであった。しかし、その甘美も今や喜びを分かち合う友がいないのであれば、苦味と変わり、その死は作者の心には裏切りと映る。この間、作者の視点は可視界を離れ、野鳥も水花も見えなくなり、意識のなかへ深く沈んでゆく。このような憂鬱と不安な状態が続くなかで、作

者の目の前に、不思議にも、亡き友が姿を現わし、彼に同情し、説論する。この時の友人の説論は前にも触れたが、自然には治癒力があるのだから、これに目を開けというもので、

Open your eyes once more to the sunshine; let it enter freely and fill your heart, for there is healing in it and in all nature.<sup>18</sup>

と述べる。チフチャフが長い道程をさまざまな危険を冒して渡り、目的地に着くやその困難を忘れ、復活の歌を歌うのであれば、鳥以上に高級な理性をもつお前は、それを上手に役立てよと説く。作者は思索を続けるが、この理性というものが友を失った悲しみを救うものではないこと、信仰もまたこれを救助するものではないことを結論する。そして悩んだあげく、昔からの救助法たる自然の治癒力を信じるに至る。この世の幸福が地球以外の星からやってくると想像した詩人や哲学者を間違っていると判断し、生きてこの世の自然美を味わおうとする結論に達するのである。彼の考えでは、死者は完全に死んでしまうのではなく、自然に在ってその眼目となり、それを表現するものなのである。従って、可視界は死者や死者に対する悲しみの故に、新たな光明を帯びることになると考える。この思索を通してみられる作者の自然観及び死観は非常に主観的で、主情的であることに気づく。既に老境に達し、死期の近づいていた作者が、光の世界で故人が待っていることを想像しながらも、なお生きて、この世の自然を味わおうとする生への執着が、強く滲み出たエッセイになっている。

このエッセイに似て、作者自身の内面に目を向け、想い出や記憶の世界を扱ったのが、“Apple Blossoms and a Lost Village”である。もっとも、これは1918年11月に *Review* 誌に掲載されたものであるが、内容面から言えば前述の思索的で、譬喩を用いた難解な表現になっているのに反し、もっと軽いタッチで想い出や記憶を、幻想的な美しさで描いたものである。小品全体を通じて感じられることは、今や老境に達した作者が、人生の黄昏に相応しい抒情歌を歌っていることで、夕やけの色彩を思わせる、全体的に明るい調子のエッセイになっている。作者はリンゴの花はありふれていて、どこでも見られるが故に、想い出と関連しやすく、それだけになお魅力があると考え。しかし、前述のエッセイの場合と同様、リンゴの花そのものはいつの間にか視界から消え去り、Clyst Hyden という村を訪れた時の想い出に耽ける。そして、朦朧とした意識のなかで、その記憶を再現し、夢と現実の錯綜するイメージの世界を展開する。次の場面

は、作者がリンゴの花咲く5月に、やっとの思いでその村に着いた時の、村人たちの表情を記憶のなかで再現したものである。

When I came near it that sunset splendour did not pass off and it was indeed like no earthly village; then people came out from the houses to gaze at me, and they too were like people glorified with the sunset light and their faces shone as they advanced hurriedly to meet me, pointing with their hands and talking and laughing excitedly as if my arrival among them had been an event of great importance. In a moment they surrounded and crowded round me, and sitting still among them looking from radiant face to face I at length found my speech and exclaimed, “O how beautiful!”<sup>19</sup>

夕日を浴びて輝く村や、彼を取り巻く人々の顔を見やりながら、思わず「おお、なんと美しい」ともらす。村人たちはどこからともなく現われた一人の老人を指さし、噂しながら群がる。すると一人の少女が進み出て、「美しいですって。ただそれだけ。ほかには何も見えないのですか」とたずねる。彼は他にも美しいものがあるような気がするのだが、それが彼女の目なのか、声なのか、それとも彼の心を過るものなのかわからない。その少女に「心を過ぎるものって何なの」と聞かれても、彼にははっきり答えられない。「考えさせてくれ」と彼が言うと、「そうだ、考えなさい」と村人たちが笑いながら叫ぶ。彼が考え込んでいると、回りが突然静かになりはっとして目を上げると、あの美しく輝いていた村人たちの顔も、金色に映えていた村も、跡形もなく消え去っていた。この場面は読者に今様浦島を思わせるのであるが、実は作者が朦朧とした意識の世界から目覚め、突然現実界に戻ったことを意味する。作品構成に関して言えば、作者がある年の5月に見たリンゴの花の美しさに感動したのが契機となり、その前年の10月、あるホテルのベッドで、以前訪れた Hyden 村の想い出に耽けるという形式になっている。即ち、現在・過去・過去の過去という三重の時間の流れが、複雑に構築されているのである。この作品構成のもたらす描写の美しさは、前述の“The Return of Chiff-Chaff”を遙かに凌ぐ。また、老境に達した作者の心理状態が、全面に表白され、その表現に味わい深いものが感じられるなど、作者晩年の佳作と言えよう。Frederick 教授もこれを認め、“Samphire Gatherer”と並んで、章中最も優れたエッセイであると述べたのはさすがに卓見である。<sup>20</sup>

## V 墓地への旅人

作者のエッセイについて語る時、村の墓地や教会付属の墓地に示す関心を抜きにして、語ることは不可能であろう。この作品においても彼は“Her Own Village”や“In Chitterne Churchyard”において、何年振りかでやっと念願かかって、故郷の墓参に訪れた婦人の言動を、忠実に描写している。前者は Derbyshire にある Chilmorton 村を訪れた時、村の教会の墓地で、母娘が墓参りしているのに出合った時の印象を記したものである。この母親は、連れの娘が生後3ヶ月の時に夫の郷里に行き、以後14年の間、生地に戻ったことがなかった。この間、いつかは娘に故郷を見せてあげたいと思いながら、遠く離れているため、またその費用も無いために、実現できずにいた。36歳になるその母親は、田舎の肉体労働者の妻らしく、年齢以上に老けて見えたが、自分の生まれた村がイギリスで一番美しく、なつかしい所と考える点は、国境を越えて世の母親の等しく思う気持であろう。彼女はまた、死ぬ時は両親や先祖と同墓地に眠りたいと望み、生まれ故郷を離れた所で眠るのは、考えただけでも悲しいことだと述べる。このような郷愁、あるいは親を思う気持は、何も田舎で土に親しむ村人に限ったことではなく、他村あるいは他国へ嫁ぐ運命にあった女性一般にあてはまる心情であろう。「小さき物への旅人」を自認する作者は、その小さき物を対象にしながら、普遍的真理を含む作品に仕上げている場合が多いのである。

“In Chitterne Churchyard”においても、Chitterne 村の鳶の絡まる古びた教会を訪れた作者が、その付属墓地で出合った二人の老婦人の印象を記している。二老婦とも辺りの鳶を掻き分けては墓石を探し、もはや磨り減って苔の生えた碑文を読んでは、また別の墓石を探すという動作を繰り返す。この二老婦は初対面同志であったが、その会話から、交通の不便な村から一日がかりでやって来たことがわかる。二人とも長年墓参の夢を抱いていたこと、しかも同じ日に、同じ場所でその夢が実現したことを知り、その偶然の一致に驚き合うのである。更に、二人とも同じ村の出身者で、それぞれ7歳と10歳の時にそこを離れて以来、一度も戻ったことがなかった。そういう次第で、親や祖父母、あるいは親類の眠る墓を探しに来たというのが、二人の共通した目的であった。二人の会話から作者は、どちらも60歳を遙かに過ぎ、未亡人であるが子宝に恵まれ、今は幸福な生活を送っていることを知る。この間、作者は対象者から離れた位置にあり、終始客観的な立場で観察するが、その表現は老婦

への思い遣りや、同情心で満ちている。この小品はしかしながら、ここで終わっているのではなく、それぞれ息子や娘を自慢し合っているうちは良かったが、これが嵩じて口論となり、喧嘩わかれしてしまう結末になっている。従って、読者はこのような結末に、最初の同情心もどこえやら、可笑しさと悲しみの入り雑じった気持を味わうであろう。作者の友人であり、文人でもあった Roberts が作品全体を通じて、“I think the one I like best was that about the two old women in the churchyard”<sup>21</sup> と述べ、このエッセイを賞賛しているのは、このような前半と後半の逆転劇が面白いからでもあろう。

作者は“A Haunter of Churchyard”と題したエッセイのなかで、そのタイトルが示すように、地方の墓地、特に教会付属墓地を訪れてはそれについて記している。彼が墓地を訪れるについてはいろいろな理由が考えられようが、単に墓碑銘を読んだり、あるいはそれを暗記するために出かけるのではない。第一に考えられる理由は、彼の場合、墓石に刻まれた文字そのものに関心があるからである。しかもその文字が、風雨に晒され、判読も容易でないほど古びた文字に関心を寄せる。それは現代の碑文が形式的で、単調であるのに反し、古い時代のものにはその時代の特徴が秘められているからである。17世紀の碑文に例をとれば、作者はこれを最上のものとするのであるが、まずその墓石が300年の風雪に絶え得るような硬質の石であったこと、またそのような硬質の石に文字を刻み込まねばならなかった石工が、相当な労力を費やした形跡があることなどが、忍ばれるのである。そのような墓石に刻み込まれた文字は、独得な緩りと形態を有し、見る者に風変りな魅力を与えるのである。次にこれを内容的に見れば、古い碑文には時として、無意識のうちにユーモアのある場合が発見され、それでいて読む者に涙を催させるものがある。こういう碑文を作者はベストだと述べ、いろいろな例を挙げて説明する。このような古い墓石にはそれなりのしきたりや様式があるように、そこに刻まれた文字にもその時代の個性が見られる。興味深いことに、ジャコビアンやキャロライン時代の碑文には Donne や Crashaw, あるいは Vaughan などの作品に見られるように、conceit や fantasticalness が採り入れられて、当時の文学上の特徴が反映されていることである。作者が墓地を訪れる理由として第二に考えられるのは、文字そのものが持つ魅力もさることながら、碑文の内容に強い関心があるためである。例えば、かつては村の主役を演じながら、永遠に忘れ去られてしまった村人の記録や感情が刻まれている碑文などがそうである。要するに作者は、古への村人に対する感情を呼びさましてくれ、感慨にふけさせてくれ



るような碑文に、多大な関心を示すと言える。こうして作者は墓地にあって、“Elegy”の作者 Thomas Gray 同様、忘れ去られた村人に思いを馳せる。ただし彼の場合、死者だけではなく、遠い過去に離村し、もはや行方も知れなくなった子孫へも思いが及ぶ。その子孫は今いずこに住むやと安否を問い、その子孫は祖先の名前や伝説を、あるいは村の名前を知るやと推測する。彼の考えでは、死者の何かが子孫のなかに生き残っており、このためその声を聞いた子孫は、地の果からでも故郷に戻ってくるのだという。その場所、その村、その土壌、受け継がれてきた想い出や感情の何かが、子孫を故郷と呼び戻すのだと信じるのである。先に引用した二人の老婦や母娘の墓参の例は、このような彼の想念が要因となって描かれたものと思われるのである。

## VI 死者との交流—結語—

アルゼンチンの大草原で生を受け、恵まれた自然環境で動植物や鳥類と生活を共にしてきた作者が、意を決して祖先の国へ渡ったのは1874年、33歳の時であった。以後、大都市ロンドンで、貧乏ながらも所帯を持ち、文筆業に専念するが、彼のどこかに自然を求める気持があった。否、むしろ大都市ロンドンが、自然を求めざるを得ない精神状態に彼を追いやっただと言った方が、妥当なのかも知れない。都市は人間を自由にし、解放感を与えてくれるかも知れないが、一方では人口過密や騒音、あるいは多忙や時間的拘束など、大都市のかかえる問題のため、心の安らぎが失われる傾向がある。大都市にあって、人為的生活条件を強いられた作者にとって、心の安らぎは是非とも必要なことであった。この忙しい気持ちを解消するために、彼は田舎に出かけ、母なる自然と接触することで、心の調和を保とうとした。彼は始めて外出し、森や野原を眺めた時、感動のあまり涙が出たと述べている。彼が自然に目を向けたもう一つの理由は、彼の自然思想に由来するのであって、これが根本理由と考えられる。前にも触れたように、自然は自己の一部であり、自己であるという思想である。例えば、彼は空・雲・雨・風・岩・土・動物・植物等、これら全てが自己の一部であり、自己であると考えるのである。このことは彼が精神的にも、また肉体的にも、自己と環境を完全に調和させ、周辺の空間に自己を拡張していることを意味する。自然との関係を、このように深い絆で結ばれていると考える彼は、対人間社会についてはどのような見方をしているのだろうか。まず、大都市に住む人々の生活について言えば、軽蔑やさまざまな不快要素で着色されたものは別として、純粋な人間的愛情は存在しないと考える。

街頭を長蛇の列をなし、互に無関心を装いながら往来する人々に、彼は同胞意識を持ってないのである。彼にはこれらの人々が、人間の顔をした蟻の群に思え、愛情も同情も湧いてはこない。他方、農村社会においては、人々はまだ人間性を失ってはいないと判断する。それ故に彼は村人を愛し、はては自身をも、村の精神をもった村人であると主張する。ここで注目すべきことは、村人と自称する彼が、単に日常言葉を交わす生者だけに関心を示すのではなく、目に見えぬ村人たる死者をも含めている点である。ここに至って、彼がなぜ村や墓地を訪れるのか、その理由が一層明確になるのである。村人の心を持った彼が、村人を愛したのも、また不可視の隣人を興味の対象にしたのも、自然なことであつたと言わざるを得ない。しばしば彼が各地の墓地を訪れたのも、結局そこに死者が眠っているからであり、かれらと一緒にいるのが嬉しいからである。彼の死者に対する信仰は村人のそれであり、キリスト教徒に見られる信仰とは異なる。彼自身の信仰によれば、死者は審判を受けたり、別世界で眠るのではなく、埋められた場所で、しかも依然として村人のままで、眠っているのである。しかも、かれらはぐっすり眠っているのではなく、生者が訪問したり、話しかけたりするのを聞聞しており、これを楽しみに待っているのだと信じる。彼のこのような信念に従えば、生者と死者の交流が可能になり、その交流点が教会であり、墓地であることになろう。既に述べたように、現実界においてあらゆる自然と一体になった作者は、ここに至って死者の国まで自己を拡張し、死者との交流を通じて此岸と彼岸との結合を可能にする。「小さき物への旅人」は実は、地上と地下の時間や空間を超越した壮大な世界を旅していたのである。

## Notes

1. W.H. Hudson, *A Traveller in Little Things in The Collected Works of W.H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 2.
2. Hudson, p. 30.
3. Richard E. Haymaker, *From Pampas to Hedgerows and Downs* (New York: Bookman Associates, 1954), p. 340.
4. Hudson, p. 110.
5. Ibid., p. 136.
6. Ibid., pp. 138—39.
7. Ibid., p. 143.
8. Ibid., p. 68.
9. Ibid., p. 240.
10. W.H. Hudson, *Birds and Man* (London: Long-

- mans, Green and Co., 1901), p. 214.
11. Edward Garnett, ed., *153 Letters from W.H. Hudson* (London: The Nonesuch Press, 1923), pp. 160—61.
12. Hudson, *A Traveller in Little Things*, p. 95.
13. Ibid., p. 83.
14. 日本名については奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子共著『野鳥と文学一日・英・米の文学にあらわれる鳥一』（大修館, 1982）を参照した。
15. Edward Garnett, "A Note on Hudson's Spirit," *A Traveller in Little Things*, p. x.
16. J. R. Payne, *W. H. Hudson: A Bibliography* (Kent: Dawson • Archon Books, 1977), p. 31.
17. Robert Hamilton, *W. H. Hudson: The Vision of Earth* (London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1946), p. 109.
18. Hudson, *A Traveller in Little Things*, p. 102.
19. Ibid., p. 100.
20. John T. Frederick, *W. H. Hudson* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1972), p. 113.
21. Morley Roberts, *W. H. Hudson: A Potrait* (London: Eveleigh Nash & Grayson, 1924), p. 289.
22. Hudson, *A Traveller in Little Things*, p. 224.